近代主義の挫折と新世界秩序の出現：知の混沌からバハオラの未来のビジョンへ

ピエール・イヴ・モーキー

<概要>

人類の進化および文明の勃興、衰退と滅亡の研究がわれわれに教えるところは、絶えざるパラダイムが存在し、それによれば、古い秩序が新しい秩序にとって変わるのは混沌の時期をくぐるということであり、また、新秩序が最終的に出現する前には、しばしば破壊的な困難と大きな変動を必要とすることである。混沌と暴力を経て一つの秩序から他の秩序へ向かうこの困難な移行はディオニソスの古代ギリシャ神話に見ることができる。その神話の象徴的な機能は一つの状態から別の状態へカタルシスを通して移行することを可能にすることである。このような神話は象徴に支配された社会にあっては基盤となるべき組織的な要素とみなされるが、その文明内の移行を反映している。

一つの秩序全体が次の秩序へと移行する際に中心となるのは、いかにして社会全体が知識と関係しているかということである。知識の模索、知識の獲得、また、知識の進展は人間を性格づけるものであり、人間の活動の中心である。しかし、知識は、道徳的で精神的な形で使われれば、進歩と成熟と人間の向上をもたらすことができるが、誤った発展や使われ方をすると、狂信と社会の堕落や機能不全と科学技術の誤った使われ方をもたらす。

『世界平和への確証』の中で、万国正義院は、「東洋であれ西洋であれ、資本主義であれ、社会主義であれ、唯物主義の教義を説く人々」に弁明を求めた。なぜなら、「物質主義的思想が…人類の必要を満たせなかった」からである。これらの「人間の作ったイデオロギー」は、知識の新しい取り上げ方でないとすれば、いったい何であろうか？しかし、これらは物質的な人間観、物質的存在観、人間と生命から精神を抜き取った考え方に基づいている。

バハオラのビジョンが世界にもたらすものは、物質的または肉体的現実と精神的現実の融和の可能性である。このビジョンの鍵は、和合一致である。バハオラの啓示による保護に覆われているバハイの知識に対するアプローチの中心は、物質的経験と精神的経験との一致である。この発表では、まず、全世界に押し付けられた、この「人間の作ったイデオロギー」を生み出した西洋の考え方の発展を見、これらのイデオロギーがもうすでに崩壊したか、あるいは、現在、崩壊しつつあることを示したい。次に、互いに関係のある進化の二つのパターンを強調したい。この二つのパターンは、一緒になったり、分かれたりするが、筆舌を絶する混乱を生じながら、一つの秩序が倒れ、別の秩序が生まれることを表わす。社会全体は、このプロセスをまだほとんど意識していない。ただ社会が不安とあきらめと絶望をつのらせながら見ているのは、ますます多くの基本的な構造が — 経済的、社会的、文化的、精神的な構造も — 腐り、ほとんどマヒしている状態である。

最後に、バハオラが描く人類の成熟期を素描したい。成熟期には神の知識が啓示を通して人類にその目的と責任、物質世界と精神世界の関係に関する新しい理解を与えてくれるであろう。その結果、われわれの肉体的現実の目的やこの地球に存在するわれわれの生命、そして神の法やこれらの法に自由と正義を達成する手段として服従すること、人類の文明がますます進歩する際の和合一致、これらについて新しい理解を与えてくれるであろう。